

2. 両側性に二孔の副オトガイ孔を有する一例

A case of bilateral two accessory mental foramens

○坂本 りく, 泉澤 充*, 高橋 徳明*,
前川 崇嗣*, 毛利 裕希*, 藤村 朗**,
藤原 尚樹***, 田中 良一*

岩手医科大学附属内丸メディカルセンター歯科医療センター卒後歯科医師臨床研修センター, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野*, 岩手医科大学歯学部口腔医学講座歯科医学教育学分野**, 岩手医科大学解剖学講座機能形態学分野***

目的: オトガイ孔周囲に下顎管と連続する副オトガイ孔と呼ばれる小孔が存在することがある。今回, 両側性でかつ左右それぞれに二孔の副オトガイ孔を認めた症例を経験したのでその概要を報告し, 副オトガイ孔の発生起因と発見方法について考える。

材料・方法: 患者は 18 歳, 女性。2013 年 8 月, 下顎の突出感を訴え受診した。パノラマ撮影で異常を認めなかったが, 歯科用 CBCT 撮影にて両側性に二孔の副オトガイ孔が認められた。

結果: オトガイ孔と副オトガイ孔の区別は, 下顎管と連続性が見られる頬側孔の面積で最大のもをオトガイ孔, それ以外の頬側孔を副オトガイ孔とした。副オトガイ孔は右側では近心上方, 近心下方に 1 孔ずつ, 左側では近心上方, 遠心下方に 1 孔ずつ開口していた。

考察: 副オトガイ孔の発生起因として, 下顎骨が成長するに従い, 下顎管本幹から分岐した神経血管束の周囲に骨添加したものが下顎管の側枝となり, 副オトガイ孔として開口すると考察した。副オトガイ孔を発見するためにはコーンビーム CT あるいは口内法撮影が有用である。

結論: 口腔外科手術, 根管治療, 局所麻酔時には, 偶発症を回避するためにコーンビーム CT あるいは口内法撮影にてオトガイ孔だけではなく副オトガイ孔の存在を把握し, 留意するべきである。

3. 異時性に複数の過剰歯の発生を認めた一例

A case of metachronous supernumerary teeth

○石井 真由, 泉澤 充*, 高橋 徳明*,
前川 崇嗣*, 毛利 裕希*, 藤村 朗**,
藤原 尚樹***, 田中 良一*

岩手医科大学附属内丸メディカルセンター歯科医療センター卒後歯科医師臨床研修センター, 口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野*, 口腔医学講座歯科医学教育学分野**, 解剖学講座機能形態学分野***

目的: 過剰歯は正常歯数より多く形成された歯で, 様々な形態を呈する。同時期に複数の過剰歯を認めることはあるが, 異なる時期に過剰歯の発生を認めた報告は少ない。今回, 異時性に複数の過剰歯の発生した症例を経験したのでその概要を報告し, その発生起因を考える。

材料・方法: 患者は 14 歳, 男子。2015 年当時 9 歳, パノラマ撮影で上顎前歯部に過剰を認めたが, その他の部位に過剰な歯胚は認められないことを確認した。2021 年のパノラマ撮影では下顎左側小臼歯部に不透過像の重複が認められた。歯科用 CBCT 撮影にて, 過剰歯を認めた。

結果: 発生のプロセスで本来は退化消失していく歯胚 (第 3 歯堤) 由来の過剰歯には次の 4 つの特徴がある。過剰歯は舌側に出現し順生である。石灰化が開始する時期が永久歯の石灰化時期の後である。永久歯と形態が類似しており, 不規則な形態を呈していない。小臼歯部に出現することが多い。

考察: 下顎左側小臼歯部に出現した過剰歯について, 下顎左側 5 の本来発育することのない歯の原基 (第 3 歯堤) の発育により生ずると, 報告がある。今回のケースも同様の経過から, 第 3 歯堤から生じた過剰歯と考えられる。

結論: 過剰歯の既往がある患者では永久歯列期での過剰歯の報告もあることから定期的な観察が必要である。下顎両側小臼歯部に過剰歯の出現を認めた報告が過去にあるため, 今回の場合, 特に対側における過剰歯の出現に今後注意する必要がある。

4. 術後の尿中にキサンチン結晶が認められた